

母性看護実習における母性意識の変化

笹野京子¹⁾, 長谷川ともみ²⁾, 堀井満恵²⁾, 塚田トキエ³⁾

¹⁾ 富山医科薬科大学医学部看護学科研究生

²⁾ 富山医科薬科大学医学部看護学科

³⁾ 聖隷学園浜松衛生短期大学

要 旨

本研究は、母性看護実習が学生の母性意識に与える変化および母性意識と性役割観の関連を調査することにより母性看護実習の効果を明らかにすることを目的とした。また先行研究との比較により現在の看護大学生の特徴を明らかにすることで今後の実習指導の基礎資料を得ることを目的とした。

対象は、1997～2000年に母性看護実習を行い研究に同意の得られた本学4年次看護学生女子188名であった。調査内容は、母性意識に関しては「母性理念質問紙」を実習前後に用い、また、性役割観に関しては「女性に対する態度尺度」を実習前に用いて調査を行った。その結果、母性意識は、実習前後の比較において実習後に母性意識の上昇がみられ、実習の効果が確認できた。実習体験が実習後の母性意識に与えた影響を検討したところ、実習前に母性意識が低い者に正常分娩見学、授乳介助体験が実習後の母性意識の変化に関与していた。性役割観では、革新的男女平等観を抱く者が90名(47.9%)、中間層が89名(47.3%)、保守的・因習的女性役割観を抱く者が9名(4.8%)であった。実習前に革新的男女平等観を抱く者は母性意識が低く、保守的・因習的女性役割観を抱く者は母性意識が高かった。また、実習後に革新的男女平等観を抱く者と中間層において母性意識の上昇がみられた。先行研究との比較では、実習前の母性意識は低く、実習前後では革新的男女平等観に傾く傾向があった。

以上より、母性看護実習は、母性意識の高揚において評価でき、とりわけ正常分娩見学、授乳介助において効果があることが明らかとなった。

キーワード

看護教育、母性看護、性役割、実習効果、母性意識

序

母性意識は生まれつきの本能ではなく、先天的な母性の特質と結びつき、生後周囲からの影響を受けながら成長し、経験することにより発達すると考えられている¹⁻³⁾。しかし、近年の青年期女性は、核家族化、地域社会の関連性の稀薄さ、受験戦争に伴う塾通いなどにより、子どもと接触す

る機会が少なくなっている。この現象は、成長過程における母性意識を発達させる個々人の体験を減少させ、母性意識の変容をもたらしている⁴⁻⁶⁾。看護大学生においては、看護を実践する上で、より健全な母性意識の獲得が望まれる。しかし、彼らの成長過程においても同様に環境の変化による母性意識の変容が推測される。

また、現在働く女性の数は全雇用者の約4割を

占めるといわれ、同時に働く女性の高学歴化、継続年数の長期化により女性労働者の成熟化が進展している⁷⁾。この女性の社会進出に伴い伝統的な男女の性役割観も変化しつつあるように考えられる。このような現状の中、看護大学生の母性意識と性役割観の関連についても明らかにすることは意義深いことと考える。

母性看護実習評価に関する先行研究としては、母性意識を指標とした研究が多くなされており、実習は母性意識を高くする^{8) 9)}ことや対児感情においても回避感情を低くするという効果が報告されている。しかし、その殆どが実習前後の比較のみの検討であり、その変化が実習における種々の体験のうち、どれに起因するのかについての検討は少ない。

性役割に関する先行研究では、親の性役割に対する考えは娘の性役割に対する認知全般に影響を及ぼし^{11) 12)}、母娘の関係において母との肯定的な関係が娘の女性性受容に影響していた¹¹⁾との報告や、月経前症候群（以下PMS）と性役割観の関連でPMSを治療している人は女性的役割を受容できない人が多く、月経に対しても否定的である¹³⁾という報告などがみられ、性役割観と性の受容にかかわる研究がされている。

母性意識と性役割観との関連性についての先行研究では、保守的・因習的女性役割観を抱く者より革新的男女平等観を抱く者に実習後に母性意識が高くなるという報告⁸⁾がある。しかし、母性看護実習における母性意識と性役割観との研究は非常に少なく、一貫した知見が得られていない。また、年代が異なることにより性役割観にも違いが予測される。

これらのことから本研究では、本学の母性看護実習が学生の母性意識にどのような変化を与えるのかについて、実習体験も含めて検討を加え、さらに、現代の看護大学生の性役割観と母性意識の関連からも実習効果を明らかにし、今後の学生実習指導の基礎資料を得ることを目的とした。

用語の定義

母性意識：本研究では、花沢の『母性理念質問紙』¹⁴⁾の概念に基づき、母性意識を、「女性が母

親になる、あるいは母親であることの自覚と、その自覚に基づく妊娠・分娩・育児への態度や価値観とその両方を包括する概念」と捉える。

性役割観：1978年にSpence, Jらにより作成され東らが日本に紹介した『女性に対する態度尺度（Attitudes Toward Women Scale : ATWS）』¹⁵⁾の概念に基づき、性役割観を「職業生活、教育や知的な活動、デートの際の振る舞い、家庭内の男女の役割、夫婦関係といった広い範囲において、女性の持つべき権利や役割におけるフェミニスト的態度すなわち男女の平等主義的態度」といった個人の価値観と捉える。

研究方法

1. 調査対象

調査期間内に母性看護実習を行った当大学4年次女子学生252名を対象に本研究の主旨を説明し、調査に協力の得られた188名を対象とした。

2. 調査期間

1997年4月～2000年10月

3. 方法

母性看護実習前後に母性意識として『母性理念質問紙』¹⁴⁾を、実習前に性役割観として『女性に対する態度尺度：ATWS』¹⁵⁾を用いて自記式・留め置き回収法にて調査を行った。

「母性意識」の質問内容は27項目で、母親役割を肯定する項目18項目と母親役割を否定する項目9項目になっている。採点は各項目について「非常にそう思う」を+2点から、「非常にちがう」を-2点の5段階評定とした。肯定項目、否定項目別にそれぞれの得点を集計し、肯定項目得点、否定項目得点として実習前後の得点変化を分析した。なお、肯定項目は得点が高いほど母性意識が高く、否定項目は得点が低いほど母性意識が高いことを示す。

実習後に母性意識（肯定項目・否定項目）得点が上昇または下降する変化は実習中のどのような体験に関わるかを探るために実習体験項目を用いて多重ロジスティック回帰分析をおこなった。ロジスティック回帰分析をおこなう上で、以下の手続きをとった。上昇群・下降群との比較については、

より実習の影響が分析できるように、「上昇群」を実習後の得点が実習前より2点以上の上昇があった人とし、「下降群」を-2点以下の下降があった人とした。また、変化しなかった群（実習前後の得点差が-1～1点の者）を「比較群」に含め（上昇群または下降群のどちらかの群と変化しなかった群）、上昇群または下降群の群と比較した。また、分析にあたっては、実習前の得点が高かった者と低かった者では、もともとの母性意識の発達に違いが予測されるため、肯定・否定項目別に実習前の得点が平均点以上の者（高得点群）と平均点以下の者（低得点群）に群別して上記の分析を行った。その方法の詳細については以下のとおりである。

肯定項目：

- ・高得点群で下降群（-2点以下）と比較群（上昇群と変化がなかった群：-1点以上）の比較。
- ・低得点群で上昇群（2点以上）と比較群（下降群と変化がなかった群：1点以下）の比較。

否定項目：

- ・高得点群で下降群（-2点以下）と比較群（上昇群と変化がなかった群：-1点以上）の比較。
- ・低得点群で上昇群（2点以上）と比較群（下降群と変化がなかった群：1点以下）の比較。

なお、本研究においての「女性に対する態度尺度」の α 係数は0.70であり、「母性理念質問紙」の実習前後の α 係数は0.60～0.69であった。

「性役割観」の質問内容は15項目で、「非常に反対」を0点から、「非常に賛成」を3点の4段階評定（逆転項目7項目）とし、全項目の合計得点を性役割観得点とした。また、性役割観については、東ら¹⁴⁾の研究と同様に、合計得点が25点以下のものを保守的・因習的女性役割観群とし、26～33点のものを中間群とし、34点以上のものを革新的男女平等観群として分析をおこなった。

分析は統計解析用ソフト SPSS 10.0J を用いた。

結 果

対象の年齢の範囲は、21歳から26歳、平均年齢は21.4歳（SD±0.68）であった。実習項目では、沐浴実施とおむつ交換は、殆どの者が実施してい

た（表1）。

表1. 対象の年齢，実習体験

		n=188		
		範囲	M	SD
年	齢	21-26	21.4	0.68
実習の体験		n	%	
正常分娩見学				
	あり	120	63.8	
	なし	68	36.2	
帝王切開見学				
	あり	45	23.9	
	なし	143	76.1	
NICU見学				
	あり	22	11.7	
	なし	166	88.3	
沐浴実施				
	あり	188	100.0	
	なし	0	0.0	
おむつ交換実施				
	あり	185	98.4	
	なし	3	1.6	
瓶哺乳実施				
	あり	158	84.0	
	なし	30	16.0	
乳房マッサージ実施				
	あり	148	78.7	
	なし	40	21.3	

1. 母性意識の結果

肯定得点の得点範囲は-32～32点、否定項目の得点範囲は-18～18点である。実習前の肯定項目の最低点は-20点、最高点は28点であり、平均点は7.1点（SD±6.9）であった。否定項目の最低点は-11.0点、最高点は7.0点であり、平均点は-2.8点（SD±3.3）であった。実習後の肯定項目の最低点は-10点、最高点は33点であり、平均点は9.4点（SD±7.7）であった。否定項目の最高点5.0点、最低点は-14.0点であり平均点は-3.5点（SD±3.3）であった。

1) 実習前後の母性意識の比較

実習前後の母性意識得点の比較では、実習後に肯定項目は上昇し、否定項目は下降する変化がみられ母性意識は有意に高くなっていた（ $p < 0.001$ ）（表2）。また、設問別にみた結果、実習後の肯定項目で18項目中11項目において有意に得点の上昇があり（ $p < 0.05 \sim 0.001$ ）（表3）、否定項目では、9項目中4項目において有意な得点の低下が

表 2. 母性意識の実習前後の変化

項目	実習前		実習後		***
	M	SD	M	SD	
肯定項目	7.09	6.91	9.44	7.70	***
否定項目	-2.78	3.26	-3.51	3.30	***

n=188

対応のある t 検定 ***p<0.001

みられた (p<0.05~0.01) (表 4)。

2) 実習後の母性意識の変化

実習後の母性意識得点の変化を表5に示した。肯定項目において1点以上得点が上昇した者は117名 (62.2%)、変化無しの方は18名 (9.6%)、-1

表 3. 母性意識 (肯定項目) 設問別得点の実習前後の変化

肯定項目	実習前		実習後		
	M	SD	M	SD	
1. 妊娠, 女にとってすばらしい出来事である.	1.43	0.61	1.65	0.54	***
2. 赤ちゃんを産むことができるのは, 女の特権である.	1.39	0.66	1.49	0.62	*
4. 赤ちゃんを産んではじめて, 子どもの可愛らしさがわかる	-0.12	1.01	-0.16	1.18	
5. 赤ちゃんを無事に産むためなら, どんな苦しみも我慢できる.	0.47	0.87	0.68	0.94	***
7. 女は子供を産むことで, 自分が生きた証拠を残すことができる.	-0.23	0.95	-0.07	0.95	*
8. どんなことをしても, 赤ちゃんは母乳で育てるべきである.	0.13	0.92	0.13	0.85	
10. 子どもを産んで育てるのは, 社会に対する女性のつとめである.	-0.39	0.85	-0.33	0.91	
11. 女は子供を持つことで, 人生の価値を知ることができる.	-0.17	0.93	-0.03	1.06	*
13. 育児は女に向いている仕事であるから, するのが自然である.	-0.19	0.87	-0.13	0.96	
14. 子どもを産んで育てることは, 自分の成長につながる.	1.44	0.62	1.50	0.59	
16. 子どもを産んで育てなければ, 女に生まれた甲斐がない.	-0.70	0.90	-0.41	1.03	***
17. 子どもがいることで, 家庭生活はより楽くなる.	1.16	0.70	1.31	0.64	**
19. わが子の成長を見届けるために, 長生きしなければならない.	0.64	0.83	0.76	0.74	*
20. 母親がわが子を自分の一部だと感じるのは当然のことである.	0.66	0.90	0.76	0.95	
22. わが子のためなら, 自分を犠牲にすることができる.	0.44	0.76	0.67	0.79	***
23. 子どもを育てるのは, 産みの母が最良である.	0.50	0.95	0.52	0.99	
25. わが子の存在を感じるだけで, 毎日の生活に張りが出る.	0.78	0.63	1.09	0.68	***
26. 育児に専念したいというのが, 女の本音である.	-0.16	0.82	0.01	0.85	**

n=188

対応のある t 検定 *p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001

表 4. 母性意識 (否定項目) 設問別得点の実習前後の変化

否定項目	実習前		実習後		
	M	SD	M	SD	
3. 妊娠した自分の姿は, 想像しただけでみじめである.	-1.27	0.67	-1.38	0.65	*
6. 女だけが妊娠やお産の苦勞をするのは, 不公平である.	-0.34	1.00	-0.56	0.93	**
9. 予定していない妊娠の場合は, 人工中絶もやむを得ない.	-0.10	0.80	-0.23	0.86	*
12. 結婚生活を楽しむためには, 子どもをつくらないほうがよい.	-0.99	0.73	-1.04	0.78	
15. わが子を他人に預けてでも, 自分の仕事は続けるべきである.	-0.29	0.58	-0.30	0.64	
18. 育児は妻だけでなく, 夫も分担すべきである.	1.58	0.53	1.56	0.60	
21. 育児に追われていると, 若さが早く失われる.	-0.20	0.91	-0.36	0.91	*
24. 育児から開放される時に, 人間らしい自由な生活ができる.	-0.75	0.74	-0.73	0.80	
27. 母親が子どもの成長を生き甲斐にするのは間違っている.	-0.43	0.81	-0.47	0.77	

n=188

対応のある t 検定 *p<0.05, **p<0.01

表5. 母性意識の実習前後の上昇・下降の人数

項目	得点上昇者 n(%)	無変化者 n(%)	得点下降者 n(%)
肯定項目	117 (62.2)	18 (9.6)	53 (28.2)
否定項目	60 (31.9)	25 (13.3)	103 (54.8)

得点上昇者:1点以上
変化無し者:0点,
得点下降者:-1点以下

点以下得点が下降した者は53名 (28.2%)であった。否定項目において得点が上昇した者は60名 (31.9%), 変化無しの者は25名 (13.3%), 下降した者は103名 (54.8%)であった。

3) 母性意識の変化に対する多重ロジスティック回帰分析による検討

実習後の母性意識得点が上昇または下降の変化に参与する体験の検討をおこなった (表6)。分

析に用いた体験項目は、殆どの者が経験した沐浴実施とおむつ交換実施は除き、分娩見学、帝王切開見学、NICU見学 (受け持ち褥婦同伴)、瓶哺乳実施、乳房マッサージ実施、授乳介助の6項目とした。参与がみられた項目のオッズ比は、肯定項目の低得点群において、比較群に比べ上昇群は乳房マッサージ実施が0.29 (p=0.07)であり、否定項目の高得点群において、低下群は比較群に対し正常分娩見学が4.59 (p<0.05)、授乳介助実施が5.28 (p<0.05)であった。

2. 性役割観の結果

性役割観では、45点満点で、最高点42点、最低点20点であり、平均点は32.7点 (SD±4.0)であった。革新的男女平等観群である34点以上の者は90名 (47.9%), 中間群の26点~33点の者は89名 (47.3%), 保守的・因習的女性役割観群である25点以下の者は9名 (4.8%)であった (表7)。

表6. 母性意識に影響する実習体験のオッズ比

群	n	正常分娩見学	帝王切開見学	NICU見学	瓶哺乳実施	乳房マッサージ実施	授乳介助実施
肯定項目							
高得点群 ⁺ (比較群/下降群) [§]	107	0.75	1.50	0.53	0.61	0.52	0.68
低得点群 ⁺ (上昇群/比較群) [∴]	81	2.15	0.68	1.39	1.80	0.29 [#]	1.67
否定項目							
高得点群 [※] (下降群/比較群) [§]	65	4.59 [*]	0.72	7.30	1.13	1.21	5.28 [*]
低得点群 [※] (比較群/上昇群) [∴]	123	1.45	0.60	0.65	1.00	0.55	0.73

*p<0.1, *p<0.05

+ :肯定項目の高得点群は実習前の平均点(7点)以上, 低得点群は平均点(6点)以下の群別

※ :否定項目の高得点群は実習前の平均点(-2点)以上, 低得点群は平均点(-3点)以下の群別

§ :肯定項目, 否定項目の高得点群での比較群は得点が-1点以上の群, 下降群は得点が-2点以下の群

∴ :肯定項目, 否定項目の低得点群での上昇群は得点が2点以上の群, 比較群は得点が1点以下の群

表7. 性役割観群別の平均点

n=188					
性役割観群	得点範囲	n	M	SD	
革新的男女平等観群	25点以下	9	24.33	1.66	
中間群	26~33点	89	30.13	2.21	
因習的・保守的女性役割観群	34点以上	90	36.08	1.83	

3. 母性意識と性役割観との関係

表8・9に性役割観別にみた母性意識の得点を表した。

性役割観別母性意識(肯定項目)の実習前の得点は、保守的・因習的女性役割観群の平均得点では12.4点(SD±3.9)、中間群では8.6点(SD±6.4)、革新的男女平等観群では5.1点(SD±7.0)であり、実習後の得点は、保守的・因習的女性役割観群では12.7点(SD±4.7)、中間群では11.4点(SD±7.4)、革新的男女平等観群では7.1点(SD±7.6)であった。実習前後の比較では中間群と革新的男女平等観群に母性意識の有意な上昇($p < 0.001$)がみられた。また、実習前の性役割別母性意識(肯定項目)では、保守的・因習的女性役割観群と中間群($p < 0.05$)、保守的・因習的女性役割観群と革新的男女平等観群($p < 0.01$)に有意差がみられ、保守的・因習的女性役割観群は母性意識が高く、革新的男女平等観群は母性意識が低い結果であった。実習後もそれぞれの群で得点

の上昇はみられたものの、保守的・因習的女性役割観群の母性意識が高い結果であった。

性役割観群別母性意識(否定項目)の実習前の得点は、保守的・因習的女性役割観群では-3.3点(SD±3.0)、中間群では-2.7点(SD±2.9)、革新的男女平等観群では-2.8点(SD±3.6)であり、実習後の得点は、保守的・因習的女性役割観群では-3.2点(SD±1.9)、中間群では-3.4点(SD±3.2)、革新的男女平等観群では-3.7点(SD±3.6)であった。実習前後の比較では、肯定項目と同様に否定項目でも中間群($p < 0.05$)と革新的男女平等観群($p < 0.01$)に母性意識の有意な上昇がみられた。しかし、否定項目においては性役割観群別母性意識に得点差が少なく実習前・後とも群別の有意差はみられなかった。

また、性役割観と母性意識との相関関係をみた結果、肯定項目で $r = -0.28$ ($p < 0.001$)であったが、否定項目では相関はみられなかった。

表8. 実習前後の性役割観別の母性意識(肯定項目)の変化

性役割観群	n	実習前		実習後		
		M	SD	M	SD	
革新的男女平等観群	90	5.08	7.04	7.17	7.64	***
中間群	89	8.58	6.38	11.40	7.40	***
因習的・保守的女性役割観群	9	12.44	3.94	12.66	4.69	

* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$, *** $p < 0.001$

前後: 対応のある t 検定

群間: 一元配置分散分析

表9. 実習前後の性役割観別の母性意識(否定項目)の変化

性役割観群	n	実習前		実習後		
		M	SD	M	SD	
革新的男女平等観群	90	-2.77	3.63	-3.67	3.56	**
中間群	89	-2.74	2.89	-3.38	3.15	*
因習的・保守的女性役割観群	9	-3.33	3.08	-3.22	1.86	

対応のある t 検定 * $P < 0.05$, ** $P < 0.01$

考 察

1. 母性意識

1) 母性看護実習前の母性意識

本調査による本学学生(1976~1980年生まれ)の実習前の平均点は肯定項目得点7.1点(SD±6.9), 否定項目得点-2.8点(SD±3.3)であった。この結果を母性意識について調査した先行研究と比較してみる(資料1, 2)。1993年に土居ら⁹⁾が看護

資料1. 母性意識(肯定項目)の他研究との比較

研究	対象の出生年	n	平均	SD
土居ら(1970年)		84	11.30	7.60
坂梨ら(1973~1974年)		92	8.48	7.88
本研究(1976~1980年)		188	7.09	6.92

1) サンプル t 検定 **p<0.01, ***p<0.001

資料2. 母性意識(否定項目)の他研究との比較

研究	対象の出生年	n	平均	SD
土居ら(1970年)		84	-3.67	2.90
坂梨ら(1973~1974年)		92	-2.12	3.84
本研究(1976~1980年)		188	-2.78	3.26

1) サンプル t 検定 **p<0.01, ***p<0.001

短大生84名(1970年生まれ)に行った調査の平均点では、肯定項目11.3点(SD±7.6), 否定項目-3.7点(SD±2.9)であり、坂梨ら⁸⁾が行った看護学生92名(1973~1974年生まれ)の調査の平均

点は、肯定項目8.5点(SD±7.9), 否定項目-2.1点(SD±3.8)であった。

これらの研究と今回の調査の肯定項目においては、本学学生の方が母性意識は低い結果(p<0.01~0.001)であることから、同胞の減少や生育過程で幼い子どもと接触体験の減少などの状況により母性意識の低下をもたらしたものと推測される。しかし、このことについては、同朋の数や幼い子どもとの個々人の接触体験などのさらなる調査と分析が必要である。

否定項目についても土居らが調査した学生と本学学生では、今回の学生の方が母性意識は低い結果であったものの(p<0.001), 坂梨らの調査との比較では、本学学生の方が母性意識は高い結果であった(p<0.01)。この坂梨らより本学学生の得点が高かった理由については、肯定項目と否定項目の設問内容の違いが考えられ、否定設問別に比較した結果(資料3), 3項目「3. 妊娠した自分の姿は、想像しただけでみじめである」(p<0.001), 「24. 育児から開放されるときに、人間らしい自由な生活ができる」(p<0.001), 「27. 母親が子どもの成長を生き甲斐にするのは間違っている」(p<0.05)において、本学学生の方が母性意識は高かった。反対に坂梨らの調査の方が高かった項目は、「15. わが子を他人に預けてでも、自分の仕事は続けるべきである」(p<0.001), 「18. 育児は妻だけでなく、夫も分担すべきである」(p<0.05)の2項目であった。このことは、妊娠・育児をすばらしいと思っているが、仕事を

資料3. 実習前の母性意識(否定項目)設問得点と先行研究との比較

否 定 項 目	今回	坂梨
	M	M
3. 妊娠した自分の姿は、想像しただけでみじめである。	-1.27	-0.98 ***
6. 女だけが妊娠やお産の苦勞をするのは、不公平である。	-0.34	-0.23
9. 予定していない妊娠の場合は、人工中絶もやむを得ない。	-0.10	-0.04
12. 結婚生活を楽しむためには、子どもをつくらないほうがよい。	-0.99	-0.92
15. わが子を他人に預けてでも、自分の仕事は続けるべきである。	-0.29	-0.53 ***
18. 育児は妻だけでなく、夫も分担すべきである。	1.58	1.50 *
21. 育児に追われていると、若さが早く失われる。	-0.20	-0.09
24. 育児から開放される時に、人間らしい自由な生活ができる。	-0.75	-0.54 ***
27. 母親が子どもの成長を生き甲斐にするのは間違っている。	-0.43	-0.28 *

1) サンプル t 検定 *p<0.05, ***p<0.001

続ける上で家事役割は分担すべきであると思っ
ている結果であると考えられ、社会進出が進む現代
社会の様相を映し出しているようである。しかし、
母性意識が先行研究より高いという、予測と反し
た結果であったことは、今後この否定項目につい
て、さらに追跡調査を行い検討していく必要があ
ると考える。

2) 母性看護実習前後の母性意識の比較

母性意識を実習前後で比較すると実習後に肯定
項目得点で上昇がみられ、否定項目得点で下降が
みられたことは、実習で体験することを通して学
生の母性意識は肯定的に変容するという結果であ
り、先行研究と同様の結果であった。一般に、思
春期・青年期に身近な人の母性行動を観察するこ
とや乳幼児と接触する体験は母性意識発達の促進
要因になる^{2, 16)}といわれている。この結果は、ま
さしく母性看護実習体験そのものが母性意識を促
進させるものであることを証明した。

3) 実習後の母性意識の変化に関与するものの検討

実習後の得点の上昇・下降でみると、肯定・
否定項目共に上昇している者は半数以上であった
が、下降した者も3割程度あった。これは、青年
期の多感な時期に母性実習の体験をすることは、
全ての者の母性意識を高めるとは限らないという
結果である。そこで、母性意識の実習前後の上昇・
下降に関与する実習体験を知るため実習体験項目
を用いて分析をおこなった。その結果、母性意識
が高い群である肯定項目の高得点群と否定項目の
低得点群では、どの体験も有意な関与はみられな
かったが、母性意識が低い肯定項目の低得点群で
は、乳房マッサージ実施、否定項目の高得点群で
は、正常分娩見学、授乳介助体験に関与がみられ
た。これは、もともと母性意識が高かった者には、
実習体験の有無は母性意識そのものに関与しなかつ
たものの、母性意識が実習前に低かった者にとつ
て、否定項目で正常分娩見学、授乳介助体験は母
性意識を上昇させる体験であったといえる。反対
に肯定項目で乳房マッサージ実施の有無が上昇群
により体験したものが少なかったことより、むしろ
母性意識を下降させる傾向があったといえる。
この乳房マッサージ実施については、統計的に有
意水準に達しておらず ($p=0.07$) 傾向のみであっ

たことと、先行研究がないため今後その因子を検
討する余地がある。

2. 性役割観

本研究の結果、平均点は32.7点 (SD±4.0) で
あり、性役割観は革新的男女平等観群が、約半数
を占め、反対に保守的・因習的女性役割観群は、
5%に満たないという結果であった。この結果と
性役割観を調査した先行研究と比較してみる(資
料4)。1983年に東ら¹⁵⁾の女子大生127名を対象に
行った調査では、平均点28.1点、(SD±6.0)、1996
年に坂梨ら⁸⁾の看護学生(専門学校3年生)92名
に行った調査では、平均点29.5点 (SD±4.3) で
あった。今回の調査とこの研究を比較すると今回
の本学学生の方が有意に得点の上昇が認められた。
このことは東らが調査した学生(1960年前半生ま
れ)と、坂梨らが調査した学生(1970年前半生ま
れ)と、今回の本学学生(1976~1980年生まれ)
との間で性役割観に明らかな差があり、本学学生
がより革新的男女平等観が強くなっているといえ
る。この3つの集団は、調査対象が女子大生、看
護専門学生、看護大学生と集団に違いはあるもの
の、年代を追って性役割観において男女平等観が
強くなっていた。これは年々進む女性の社会進出
や晩婚化などの影響が考えられ、看護系大学にお
いても今後ますますこの傾向の学生が多くなると
考えられる。

資料4. 性役割観と先行研究との比較

研究	対象の出生年	n	平均	SD
東ら	(1960年前半)	127	28.06	5.98
坂梨ら	(1970年前半)	92	29.45	4.27
本研究	(1976~1980年)	188	32.70	4.00

1サンプル t 検定 *** $p<0.001$

3. 母性意識と性役割観との関係

性役割観群別に母性看護実習前後の母性意識で
は結果、母性意識がもともと高い保守的・因習的
女性役割観群は、肯定・否定項目とも母性意識が
高く、実習による変化はみられなかったものの、
母性意識が低かった革新的男女平等観群や中間群
では、実習の体験を通して母性意識が、実習後に

高く変化した。これは、母性看護実習は、特に革新的男女平等観群と中間群の者にとって母性意識を促進する体験であったといえる。また、母性意識の肯定項目で性役割観と逆相関がみられたことは、先行研究には無かった結果であり、先行研究の時代に比べ本学学生の母性意識が低く、性役割観が革新的男女平等観に傾いていることを裏付けるものと考えられる。

結 語

1. 実習前後の母性意識の比較では、実習後に母性意識の上昇がみられた。
2. 実習後の変化に関与する因子を分析するため、学生が実習時体験した項目を用い分析した結果、実習前に母性意識が低い者に正常分娩見学、授乳介助体験が実習後の母性意識の変化に関与していた。
3. 性役割観では、革新的男女平等観を抱く者が90名(47.9%)、中間層が89名(47.3%)、保守的・因習的女性役割観を抱く者が9名(4.8%)であった。
4. 実習前の母性意識と性役割観との関連では、革新的男女平等観を抱く者では母性意識が低く、保守的・因習的女性役割観を抱く者は母性意識が高かった。
5. 実習前後の母性意識と性役割観との関連では、革新的男女平等観を抱く者と中間層では母性意識の上昇がみられた。
6. 先行研究との比較において、本対象は母性意識が低く、革新的男女平等観に傾く傾向があった。

謝 辞

本研究の調査に当たりご協力を頂きました学生の皆様、ならびに分析にあたっては御助言を頂きました地域看護学講座教授成瀬優知先生に心から感謝いたします。

文 献

- 1) 松本清一：母子保健の理念。母子保健概論(第2版)、松本清一、pp15-17、分光堂、東京、1983。
- 2) 新道幸恵：母性意識の形成・発展。母性の心理社会的側面と看護ケア、新道幸恵・和田サヨ子、pp97-108、医学書院、東京、1981。
- 3) 平野信義：母親を対象とした母性意識の形成過程の調査。母性愛の研究、平野信義、pp55-168、同文書院、東京、1981。
- 4) 新道幸恵：女性のライフサイクルと母性意識の発達プロセス。母子保健をめぐる指導・教育・相談—その他—ライフサイクル編、青木康子編、pp34-40、ライフ・サイエンス・センター、横浜、1998。
- 5) 森下節子：看護学生の母性意識の発達—母性看護学実習にみる意識の変容—。母性衛生33(3)：pp297-303、1992。
- 6) 三瓶まり、前田隆子、福井典子：母性意識の程度とその形成要因。鳥取医療短期大学部紀要30：pp39-43、1999。
- 7) 北原桂子：女性労働者。女性白書2000—平等・開発・平和 21世紀への課題—、日本婦人団体連合会編、pp124-139、ほるぷ出版、東京、2000。
- 8) 坂梨 薫、加藤千晶、小城原 新、宮原 忍：母性看護学実習が母性意識の発達変容に及ぼす影響—「女性に対する態度尺度」および「母性理念質問紙」の調査から—。母性衛生37(1)：pp35-144、1996。
- 9) 土居久子、大槻優子：母性看護実習と母性意識の変容—花沢の対児感情評定尺度・母性理念質問紙を用い実習前後の対児感情・母性意識の測定から—。順天堂医療短期大学紀要4：pp50-58、1993。
- 10) 森下節子：看護学生の母性意識の発達—母性看護学実習にみる意識の変容—。母性衛生33(3)：pp297-303、1992。
- 11) 伊藤裕子：青年期における性役割観の形成。pp1-44、風間書房、東京、1997。
- 12) 刀根洋子、及川裕子、内岡 恵：ジェンダー

- パーソナリティと養育体験の世代間伝達－看護学生 라이프コースと職業選択との関連－. 母性衛生41(4) : pp429-437, 2000.
- 13) Livitt E E, Lubin B: Some personality factors associated with menstrual complaints and menstrual attitude. J Psychosomatic Res 11 : pp267-270, 1990.
- 14) 花沢成一 : 母性意識の発達. 母性心理学, 花沢成一, pp 9-60, 医学書院, 東京, 1992.
- 15) 東 清和 : 性役割ステレオタイプ－その自己理解のためのツール－. 性役割の心理, pp144-145, 東清和・小倉千加子, 大日本図書, 東京, 1984,
- 16) 前原邦江 : 女性性と母性性. 女性の看護学－母性の健康から女性の健康へ－. 吉沢豊予子・鈴木幸子編著, pp59-66, メヂカルフレンド社, 東京, 2000.

Evaluation of educational efficacy of maternal nursing practice on the acquisition and development of maternal awareness

Kyoko SASANO¹⁾, Tomomi HASEGAWA²⁾, Mitsue HORII²⁾
Tokie TSUKADA³⁾

¹⁾ Research Student, Toyama Medical and Pharmaceutical University

²⁾ Toyama Medical and Pharmaceutical University

³⁾ Serei Gakuen junior college of nursing

Abstract

【Purpose】 The purposes of this study were to evaluate the educational efficacy of maternal nursing practice on the acquisition and development of maternal awareness (MA), and to clarify the relationship between maternal awareness and attitude toward sexual roles. **【Methods】** We obtained information from 188 senior female students of our nursing school by means of self-reporting questionnaires on the “maternal idea” for MA and “attitude-toward-woman” scale for sex role. **【Results】** By comparing scores before and after practice, we found that the students actually matured their MA after the practice. The logistic regression analysis showed that several practicing experiences such as observation of normal delivery and breast-feeding assistance act as impacting factors on the score changes. Among 188 responders, 90 students (47.9%) had awareness for equality of the sexes, while 9 students (4.8%) remained conservative before the practice. As for the relation between MA and awareness of special role of women (ASRW), there was a tendency that the students with more awareness for equality of the sexes show less MA, whereas those with conservative ASRW show more MA. As for the relation between ASRW and the change of MA, there was a tendency that the practice increases MA of students with matured awareness for equality of the sexes. **【Conclusion】** These findings show that maternal nursing practice for nursing students provide an opportunity to yield deeper MA, through specific experiences such as observation of normal delivery and breast-feeding assistance.

Key words

maternal awareness, maternal nursing practice, attitudes toward women,
practical effect, nursing education